手話学 研究

第19巻

2010年10月

〈巻頭言〉

坊農 真弓:

論文を投稿するという経験 1

〈大会報告〉

澁谷 智子:

日本手話学会における第 35 回大会の位置づけ: 2009 年度の大会報告 3

〈特集〉手話言語学の 50 年

亀井 伸孝:

特集「手話言語学の 50 年」: 企画趣旨 9

森 壮也×小藺江 聡:

特集対談: 手話言語学の 50 年:

日本の手話言語学はその歴史から何を学ぶべきか 11

原 大介:

手話言語研究はどうあるべきか: 捨象と抽象 29

市川 薫:

理工学的手法による手話研究の事例 43

神田 和幸:

日本手話学の歩み: 自分史的視点からのエッセイ 53

〈書誌紹介〉

菊地 浩平:

木村大治・中村美知夫・高梨克也編

『インタラクションの境界と接続: サル・人・会話研究から』 65

〈献本紹介〉

〈特集対談〉

手話言語学の50年

日本の手話言語学はその歴史から何を学ぶべきか

森 壮也
日本貿易振興機構
アジア経済研究所

soya_mori@ide.go.jp

×

小藺江 聡
国立障害者
リハビリテーション
センター学院
osonoe226@yahoo.co.jp

今号特集「手話言語学の50年」の一環として、日本と世界における手話言語学の半世紀の歴史を振り返り、研究の進展の現状を見据えるとともに、今後のこの分野の展望や課題等について検討する対談が企画されました。日本手話学会前会長の森壮也氏と、会員の小藺江聡氏に、縦横に語っていただきました。

【対談日時】 2010年7月12日 15-17時
【対談場所】 国立情報学研究所 2208会議室
【企画・構成】 亀井伸孝（大阪国際大学、編集委員 [特集担当]）
坊農真弓（国立情報学研究所、編集委員長）

【森】＝森壮也 【小】＝小藺江聡

1. 手話言語学との出会い：小藺江

【小】：私が手話言語学ということばを初めて知ったのは、1995 年のことです。

当然、それまでも手話は使っておりましたが、当時、D プロの第 1 回ザ・デフ・デイという行事に参加した際に「手話は社会の中で音声言語と同等に扱われなければならない」ですとか、「ろう文化というものがある」ですとか、そういったことをそこで初めて知りました。その時はそのことがよく分からなかったのですが、とにかく雰囲気自分が合っていたので、D プロに参加してみることにしました。

そこで、手話言語学というものがあり、手話は、日本語とは音声モダリティーか視覚モダリティーかの違いはあるにせよ、同等の言語であるということを知りました。しかし、その当時はいまいちピンときませんでした。

その後、手話の文法や音韻、語彙などの話を聞き、手話が複雑なものであると分かり、それと同時に、言語学というものは、多くの大学で研究がなされている奥深い分野であるということを知りました。

2. 手話言語学との出会い：森

【小】：森さんは、今まで数多くの手話言語学の研究の経験がありますが、手話言語学を始められた経緯などをお聞かせいただけますか。

【森】：日本手話学会創立 30 周年記念企画で、それまでの会長が一堂に会して討論をするというものがありました。その際にも、私の経験談として同じような話をさせてもらったことがあります。いくつか重複するかもしれませんが、お話しさせていただきます。

私は、高校生時代、授業中の先生の話が分かりませんので、自分で教科書を読んで勉強をしていました。高校卒業後、いざ大学に入ってみると、先生の言っている内容が教科書通りではなく、これまでの方法では難しいことに気がつきました。そこで、手話通訳が必要だと実感したのですが、当時そういった制度もなく、私が学生に手話を教えて、手話通訳やノートテイクをしてもらおうと考えました。しかし、1980 年代当時は、手話についての認知も低く、書籍も全日本ろうあ連盟が出していた本くらいで、それらを用いて「これを覚えてください」といった具合で手話を教えていました。他に方法はなかったのですが、それでも学生たちはとても熱心で、その気持ちにどうにか応えたいという思いがありました。

そんな時、ある先生が、アメリカには「手話言語学」というものがあると教えてくれました。私も小藺江さんがそうだったように、いきなり「手話言語学」といわれても、いまいちピンとこなかったのですが、「手話言語学？そういうものがあるんだな」と思ったくらいでした。

そしてもう一人、日本で初めてスワヒリ語の辞書を出版された先生の講義をとっていました。毎回の講義で手話通訳を伴っている私を見て、ろう者であると分かったのでしょう。先生は私に「手話言語の研究をしたらどうか」と勧められました。先生は世界中の情報を知っておられ、各地で講演をされていましたし、珍しい言語のことや言語とはどういうものかについての講義をされていました。その先生のお話はとても心に残りました。私の研究のルーツのひとつ

とつはその先生だとも言えます。

3. 1980 年代の手話をめぐる状況

【小】：お聞きしたいのですが、森さんが大学で手話を教えておられた 1981 年頃といいますと、日本手話と日本語対応手話の違いがまだ言われていなかったと思うのですが。どのように「日本手話が重要」ということを周囲に知らせていかれたのですか？

【森】：大学の手話サークルの先輩の聴者たちが、ろう者について理解があり、「地域のサークルでは声付きの手話を使うのでよくない」、「まず、ろう者の手話を見ないといけない」、そして「特にろうのおじいさん、おばあさんのお宅に伺うのがよい」と言っていました。

その頃、たまたま米内山明宏さんの講演があり、そこでも「ろう者の手話を使うことが大切だ」という話をされていました。このろう者の手話というのが、私が見た高齢のろうの方が使っていたものだったのです。日本語対応手話というのは、言わば日本語ですよ。それとは異なるろう者の手話を分析して、それを教えていこうとおっしゃっていました。それから、高齢のろうの方のお宅に足しげく通わせていただきました。

【小】：日本手話を分析されて、周囲のみなさんから理解されましたか？

【森】：いいえ、みなさん自分たちの手話が大切であるということは理解されていましたが、それをどのように分析していけばよいのかについては難しいという感じでした。その後 D プロが設立されたおかげで、ろう者のコミュニティ内でも本格的に日本手話の分析について議論されるようになりました。日本手話や日本語対応手話などの名称をもって議論されるようになったのは、D プロが設立された頃からです。

【小】：その頃から、手話というものが言語学と結びついてきたのですね。

4. アメリカの研究と日本の研究

【小】：森さんはアメリカの文献を読んで勉強されるということですが、アメリカ手話と日本手話は異なりますよね。アメリカの文献に書いてあることを参考にして、日本手話の場合と比較しながら検討していくという具合ですか？

【森】：確かに異なるのですが、手話の音韻についてウィリアム・ストーキーが考案した表記の方法は、そのまま日本手話でも使えます。つまり手話の音韻構造の分析の仕方は、アメリカ手話も日本手話も関係なく、同じです。また、文法については、アメリカ手話を音声英語に翻訳せず、その構造を保ったまま表情要素も含めて表記する方法があります。これも日本手話に適用することができます。

一方、日本手話とアメリカ手話は異なる言語ですので、何人かの手話講師たちからは、アメリカ手話と日本手話は分けて考えないといけないと言われました。しかし、先ほども述べましたように、アメリカの文献には、それを参考にして日本手話の研究に応用できるところもあります。

実際、日本の経済学は、ほとんど欧米系の考え方を導入しています。日本経済と欧米経済は別だからといわれると、日本は日本だけで独自の経済学を考えていかなければならなくなりますよね。そんなの不可能ですよ。さまざまな考

えを把握したうえで、日本独自の理論を打ち立てていく、それがまっとうな方法です。海外の理論を排除して独自の理論を構築するのは、大変に時間もかかりますし、困難なことです。

【小】：その通りだと思います。研究をする上で海外の文献が参考になることもあると思います。

【森】：例えば、1980 年代半ばに、アメリカの文献を参考にして日本手話の研究を進める人たちが出てきました。市田泰弘さんたち以外にも、例えば、現在、聴力障害者情報文化センターの職員をされている中（あたり）博一さんという方は、両手を用いる手話の非利き手の制約についての研究をされました。彼はアメリカの文献を参考に、アメリカ手話と日本手話の比較を行い、違いを発見しています。研究の方法自体はアメリカの文献で用いられていた手法をそのまま用い、日本手話とアメリカ手話とでは結果が異なるということを示しました。アメリカの先行研究を参照し、日本手話独自の文法規則なども解明されてきて、日本手話がどういうものかがわかってきました。

5. 手話言語学の浸透

【小】：現在、手話言語学というものが浸透してきましたが、その契機となったのはいつ頃でしょうか？

【森】：まだ、一般のろう者の中に浸透したとは言いがたい状況です。正直なところ、日本手話学会の中ですら、以前は手話言語学というものは浸透していませんでした。

まずは言語学での定義の問題ですが、言語学の対象として音声言語というものがあり、手話はその枠外にあるというのが以前の考え方でした。すなわち、音声言語と手話とは共通性があるわけではなく、それぞれがまったく別の枠組みのものだと考えられていたのです。それが 1980 年代の状況です。音声言語と手話との間に共通性を見出そうという動きはありませんでした。手話学会も主としてろう学校の教員が集まって手話の研究を行っていたような状況で、他の言語の領域にまで拡大して議論を行うこともあまりありませんでした。

音声言語の研究の手法を用いた手話の分析が日本国内でも本格的に行われるようになったのは、比較的最近の話で、2000 年に入ってからくらいです。それ以前は、まだまだといった感じだったと思います。

6. アメリカにおける手話言語学の誕生

【小】：アメリカの大学では、言語学を学ぶ際には手話が必修となっていますよね。言語学を学ぶにあたり、アメリカ手話についての知識を身につけることが当たり前となっており、ともすれば言語＝音声言語と考えてしまいかねないところを、「手話も言語である」という意識を身につけることにもつながっていると思います。同様のことを日本でするのは、難しいでしょうか？

【森】：それには歴史的な背景があります。ご存知の方もおりかと思いますが、ストーキーが 1950 年代の後半にギャロデット大学に着任した際に、言語学が専門の教授から「学生たちの使っている手話はでたらめである」という話を聞かされていました。しかし、ストーキーがいざ教室に行ってみると、でたらめと聞いていた手話を用いて学生たちが巧みにコミュニケーションを行っ

ているのを目の当たりにします。そこで、ストーキーは、もしかすると手話は言語なのではないかと考えるようになったのです。それから、彼の研究が始まりました。

その後、ストーキーはアメリカ手話の文法の本などを出し、手話が言語であることを一生懸命述べていくのですが、ろう者から「手話が言語であるわけがない」と批判されます。例えば、音韻構造の各要素について論文を出しても、手話をバラバラに分解してそれに何の意味があるのかといった批判を受けます。手話は全体として見るべき

であるというような猛烈な批難にさらされました。ストーキーの研究は、決して最初から順風満帆だったわけではないのです。

その後、ロビン・バティソンが手話の音韻規則を発表し、徐々に周囲の理解が進んでいきました。さらにその後、ジェームズ・ウッドワードが、初めてアメリカ言語学会で手話についての発表をしました。アメリカの言語学一般の世界で手話に対する見方が変わってきたのは、それからです。

さらに、言語学の世界の重鎮であるノーム・チョムスキーが、「手話は言語である」と明言しました。その結果、彼の弟子たちもみな手話が言語であることを認識して、手話の研究が広まっていきました。あのニカラグアの手話の一連の研究を手がけたのも、チョムスキーの弟子たちです。チョムスキーが手話は言語であると述べたとおり、弟子たちはニカラグアの研究でそのことを証明してみせました。そして、手話が言語であるということが瞬間に浸透していったのです。

【小】：そういう歴史的経緯の中で、言語学を学ぶにあたり手話についての知識も必要だという考え方が組み込まれていったんですね。アメリカの大学のカリキュラムにはあるのに日本にはないという問題については、今後の課題ですね。

7. ストーキー以前の手話観

【小】：ストーキーやチョムスキー以前は、どのような状況だったのでしょうか。手話は、音声言語のような言語ではないと考えられていた時代について教えてくださいませんか。

【森】：ストーキー以前は、手話が音韻構造をもつとは考えられていませんでした。語全体でひとつであって、それ以上細分化できるとは思われていませんでした。

【小】：非手指信号（NMS）についても同様でしょうか。

【森】：はい。手話は手だけの表現だと捉えられており、言語ではなく身振りであり、それ以上でも以下でもないと思われていました。例えば、手話を表出する際に両手の手の形が同じものがあるとか、そういった分析はされていませ

んでした。

【小】：例えば、私が小さい時は、手話は「サルまね」だとか「手真似」だとか言われていましたが、日本だけでなくそういう見方が世界中にあり、手話が研究対象として価値のあるものだという意識を持っていなかったということでしょうか。1880 年のミラノ会議以前は、そのような手話に対する偏見はなかったと聞いていますが、その時代はどうだったのでしょうか。

【森】：そのあたりのことについては、精通しているわけではないですが、手話が手真似でありジェスチャーだという意識だったのは変わらないと思います。言語としての内部構造が知られていたわけではないと思います。

【小】：例えば、手話を話そう者自身が、自分たちの使う手話は聴者が使う音声言語のようなものだという意識をもっていたかどうかというあたりはいかがでしょうか。

【森】：有名な話としては、オスマントルコ（現在のトルコ）で、当時はヨーロッパにまで至る広大な領土をもっていました。その王に仕えるろう者の集団があり、王の身の回りの世話を任されていました。と言いますのは、彼らは知りえた秘密を外に漏らすことはないということで雇われていたようです。このように、以前からろう者の集団は存在していたわけです。その集団内では手話でコミュニケーションがなされ、仕事も問題なくこなせていたようです。

ただ、それが聴者どうしのコミュニケーションと何らひけをとらないものであるとまで考えていたかどうかは定かではありません。そのようなろう者の小さなコミュニティは、以前からいろいろなところで存在していたようです。ですので、手話を話すということが音声言語を話すのと同様であるという意識はもっていたかもしれませんが、手話が音声言語と同等の言語であるということ、を、論拠をもって説明するということはなかったのではないのでしょうか。それは言語学のツールがあって初めて可能となるものであり、そういうものはその当時はありませんでした。しかしながら、経験の中で手話を使って問題なくコミュニケーションができるということは知っていたということですね。

8. 音声言語と書きことば

【小】：アフリカなどでは、書きことばを持たない言語も多いようです。書きことばを持っているかどうかは、言語であるかどうかの問題とは関係ないというのが言語学の見方ですね。ヨーロッパの諸言語は書きことばを持っていて、書きことばの分析もできますが、それ以外の言語ではどうでしょうか。

【森】：ヨーロッパにおいても、以前、言語学が分析対象とする「言語」とは書きことばを意味していました。しかし、その後、「言語学の父」と呼ばれているフェルディナン・ド・ソシュールという有名な言語学者が、言語学の研究で大事なのは書きことば・文字ではなく、話しことばであると述べたのです¹。と

¹（編集委員会注）ソシュールは人間の言語活動の総体を、社会的制度・記号体系としての「ラング」、言語実践としての「パロール」のふたつに区別し、両者には相互依存的関係があることを指摘している。その上で、言語学の範疇はラングにあることを主張した。それまでエクリチュール（文字）中心であった言語学および言語思想は、大きな転換を迎えた。

はいえ、それは音声言語の話しことばの範囲であり、まだ手話のことまでは念頭になかったのですが。とにかく、話しことばを分析していくことが重要であり、それこそが言語学の基礎であると、ソシュールが一番初めに主張したのです。その結果、言語といえば音声であるという考えが主流になりました。そういう流れの中で、手話は音声ではありませんので、言語学とは無縁とされてきたわけです。まず「言語の基本は音声である」ということが、周知の事実として認識されるようになりました。

その後、「では、音声を使用しないろう者の場合はどうなんだろう。手話も音声言語と同じ機能を持つのではないか」と考えられ始めました。言語といえば音声を中心であると考えられていたものが、手話も含めて考えられるように変わってきたのです。言語というのは、音声言語だけではなく手話も含めると。

つい最近の話です。昨年、東京大学の言語学者、渡辺明先生が出された『生成文法』（東京大学出版会）という教科書を読ませていただいたのですが、その中には、「ソシュールが言いたかったのは、単に音声を重視しろということではなく、言語というものは形式と意味とのつながりの中でみていかなければならない」というようなことが書かれた箇所の注釈に、言語という場合には音声だけでなく手話も含めると明記されています。今はそのように徐々に変わってきているんですね。言語という場合には、音声だけでなく、手話も含めて考えていくべきであるといったことが述べられるようになってきました。

【小】：そういうさまざまな変遷を経て、今日に至っているわけですね。

9. ストーキーとの出会い

【小】：さきほど、ストーキーについてお話しいただきましたが、森さんは実際に会われたことはありますか？

【森】：はい。

【小】：それは、すごいですね。うらやましいですね。

【森】：ラッキーでした。1995、6 年頃だったと思います。亡くなられる少し前です。アメリカ言語学会主催で毎年夏に開かれている「夏期講座 (Linguistics Institute)」があり、私も参加するために 1 ヶ月半ほど滞在していました。6 週間、毎日朝の 8 時ごろから夜遅くまで講義がありました。夜は、ろう者も聴者も言語の研究に興味がある人たちが一同に会し、みんなで議論をし、楽しい毎日だったのを覚えています。6 週間、言語学漬けで、頭のとっぺんからつま先まで全身言語学に浸っているような感じでした。このアメリカのニューメキシコ大学で講義を受けていたときに、ストーキーが来られたんです。感動しました。

【小】：みんな興奮していましたか。

【森】：この人があのストーキーなんだと聞いて、びっくりしていました。スコットランド系の方で、キルト（スカートのような民族衣装）を身にまとい、バグパイプを演奏しながら登場しました。なんせ、「手話言語学の父」と呼ばれる方ですので、とても感動して一緒に写真を撮ってもらいました。

【小】：ラッキーでしたね。

【森】：それから数年後に彼は亡くられました。訃報を新聞で知り、とても残念に思いました。

10. ストーキーの専門とその後の発展

【小】：ストーキーは幅広く研究を手がけていますが、本来の専門は何だったのでしょうか？

【森】：中世の英語です。古英語の研究です。

【小】：後にストーキーはアメリカ手話の研究を始めるわけですが、すべての分野で研究を手がけられたのでしょうか？

【森】：今は生成文法が主流となっていますが、1960 年当時のアメリカの言語学は構造主義が主流でした。ですので、言語学者たちは基本的に構造主義の研究手法を身につけていました。ストーキーはそれを手話にも応用して分析を試み、手話の細分化を行って、手話にも音韻があることを発見したのです。

そして、もうひとつ、ストーキーは手話言語学の雑誌も発刊しました。これは現在でも継続されています。*Sign Language Studies (SLS)* という雑誌で、ギャローデット大学から出されているものですが、それを初めて発刊したのがストーキーでした。手話の研究を集めてこうした雑誌を発刊して、手話言語学の礎を築いたのがストーキーだったのです。彼自身の研究は音韻論が中心で、統語論などを幅広く手がけたわけではありませんが、自分が手話言語学を始めて、それで終わってしまうのではなく、次世代の若い研究者たちを育てようと考えて、雑誌刊行のような取り組みをしていたようです。

【小】：なるほど。音韻を中心に分析を進めていたわけですね。チョムスキーが生成文法を提唱したということですが、構造主義から生成文法へと言語学的主流がシフトしていく中で、構造主義に端を発した手話言語学は、生成文法の流れとは異なる道をたどるのでしょうか。

【森】：ギャローデット大学の手話言語学研究では、ストーキーの流れは今もあります。それから、社会言語学が主流でした。チョムスキーはボストンにあるマサチューセッツ工科大学（MIT）を中心に研究を進めましたが、ボストンにも MIT を中心とした手話研究のグループがあります。このほか、アメリカにはカリフォルニアにソーック研究所というところがあり、ここでは脳科学の立場からの手話の研究が盛んです。以前、千葉大学で行われた時の日本手話学会の大会には参加されましたか？

【小】：いいえ。

【森】：それは、残念です。その際にソーック研究所のウルスラ・ベルージが来日し、大会で講演をしました。彼女は脳を中心に研究を進めています。構造主義の場合にはもっぱら言語学が中心ですが、チョムスキーたちのいる MIT の場合は心理学に近い研究手法をとります。そして、3 つ目にベルージたちの脳科学を中心とした研究があり、大きく 3 つの研究手法が存在します。他にも手話通訳に関する研究や子どもの手話言語獲得に関する研究などもあります。手話研究と言っても、アメリカ各地で得意分野が異なっています。

【小】：先日、第 10 回日本手話教育研究大会で講演していただいた M・J・ビアンヴニュ（以下、MJ）が、自分がろう者として目覚めたのはストーキーに出会ってからだと話されていました。今は、ろう者としてさかんに活動している MJ ですが、彼女が目覚めるきっかけとなったのもストーキーだったのです。それほど、ストーキーの影響力は絶大だったんですね。

【森】：そうだと思います。ギャローデット大学にいた頃も、自分の話している手話が言語であるなんて思ってもいない学生たちに、君たちの使っている手話はれっきとした言語だと、研究の成果をもとに説得力をもって話をされ、そこからろう者としての誇りをもつ学生が生まれてきました。大切なことです。

【小】：そんなストーキーに会うことができたなんて、幸運ですね。残念ながら亡くなられましたが、生きておられれば私もお目にかかりたかったです。

11.手話の音韻論

【小】：日本手話学会でもこれまで多くの研究発表がなされていますが、音韻論、形態論、統語論などさまざまな分野の中で、森さんご自身の得意分野は何かでしょうか？

【森】：音韻論です。

【小】：音韻論を研究しようと思われたきっかけですとか、研究の中で興味深かったことなどを教えていただけますか。

【森】：手話言語学の中で一番研究が進んでいるのが、音韻論です。本や論文が数多くあり、研究がしやすい分野です。

音韻論では、これまで音声言語でなされてきた多くの先行研究を参考に、手話の音韻論を研究することができます。音声言語と手話との比較分析を行いながら研究を進めていくことができるわけです。

【小】：生成文法の理論が手話の音韻について考えるヒントになるということですが、すべて英語で書かれた論文を読んで、関連付けていくなんてすごいですね。そんな芸当、ふつうはできません。

【森】：私一人では無理ですね。先ほどストーキーと出会ったと言いましたが、そのアメリカ言語学会でいろいろな講義を受けました。中でも興味をもって受講したのは、音韻論と社会言語学でした。このふたつの分野にはよい講師がいたために、多くの授業を受講しました。音韻論の場合には、音声言語の音韻論についての講義も受講しました。手話だけでなく、幅広い知識が必要ですし、分厚い本を読みながら一生懸命講義を受けました。それが、今でもとても役に立っています。音声言語の理論を身につけていれば、それを手話に応用することができます。それがないとどうにもなりません。大学のように学べる場が必要ですね。

【小】：手話だけではなく、幅広い知識を身につけて、それが手話の研究に役立ってくるということですね。

12.手話の母音とは何か

【小】：音声言語とは異なる性質をもつ手話というものを考える上で、音声言語についての知識が役に立ったという例を簡単にご紹介いただけますか？

例えば、音声言語には、基本的に母音と子音というものがあります。手話では手の形や位置、動きが音韻要素と言われていますが、音声言語では母音、子音というものが必ずあります。以前、私は手話の母音は手の形ではなく、手の運動ではないかと考えたことがあり、偶然、アメリカでも「手話の母音は、手の動きなのか、手の形なのか」という論争があることを知りました。そういう場合にも、アメリカの場合と日本の場合を比較して検討していくことが可能で

はないでしょうか。

【森】：大事なのは、「母音」とはどういうものをいうのかということをもまず考えることです。単に母音とは「a・e・i・o・u」であるというふうに考えるのではなく、子音と母音とは何が違うのか、何をもって区別されているのかを考えていかなければなりません。

【小】：母音は子音に伴うものということでしょうか？

【森】：基本的に、すべての語に存在するものが母音なわけです。母音と言うのはまず聞き取りやすいものです。いわば、目立つものなんですね。一方、子音はそうではありません。ソノリティ（響き）が高いものが母音、低いものが子音です。その差が母音と子音を区別しています。では、手話の場合に目で把握しやすいものは何でしょうか？

【小】：手話の場合は、動きだと思います。動きに加えて、手の形もそうですね。このふたつが区別しやすいものと言えると思います。

【森】：では、この手の動きと手の形というものが、手話の母音と言えるのでしょうか。先ほど小藺江さんがとても重要なことをおっしゃっていましたが、語の構成要素として必ず存在するものであるということも条件ですね。また、語を構成するさまざまな音韻要素を見ていく中で、母音にあたるのがどれなのかを考える際に、興味深いこととして、手話の語の中で手の形は必ずひとつというわけではありませんよね。

例えば、/おめでとう/という語の場合、ふたつですね。手の形はグーからパーへというように手の形が変化します。このような現象が、音声言語にあるかどうかです。実は、「あ」→「い」と音声を変化させる中で、二重母音というものが存在するんですね。そして、/おめでとう/という語の場合は、手の動きとともに手の形がグーからパーへと変化しましたが、手の動きを伴わずに、グーからパーへ変化する語があるかどうか。動きを伴わないようなものはありますか？通常、手の動きとともに手の形が変化していきますね。

そう考えると、音声言語において、音声の変化に伴って一緒に変化するものがあるかどうか。手話において手の形を母音と想定すると、動きに伴って変化していくという音韻構造であるということになります。そういうふうに、音声言語との比較の中で、手話の母音とはどういうものなのかが解明されていくわけです。

「手話の母音はこれである」という明確な結論はまだ出ていません。現在の手話言語学の見解は、手話にも音声言語で言う母音に類似したものは存在するが、音声言語の定義をそのまま持ち込むのは問題であるというのが主流のようです。手話は視覚・手指モダリティ言語であり、音声言語の中での定義を、そのまま言語一般の定義として手話に当てはめるのには、無理があります。

音声言語の母音を構成する要素がひとつであったとしても、手話の場合には手の形、動きというようにふたつあると考えても、それはそれで良いわけです。音声言語の母音にあまりこだわらずに、手話の母音というものを考えて、手話と音声言語を比較してそこから逆に言語一般、ひいては音声言語に立ち返ってこれを見ていくということも可能です。みんなで議論しあっていけばよいと思います。

【小】：なるほど。

【森】：議論の中で徐々に研究も進み、成果が生まれてくるでしょうし、細かなことも解明されてくると思います。そのためには、音声言語と手話とを言語として対等に捉える視点というものを模索しなければなりません。そのような視点に立って、音韻論について考えていかなければなりません。

【小】：現在、音韻論について研究をされていますが、音韻論の研究を通しての長期的な展望はありますか？

【森】：小藺江さんも出席されている「手話で語る手話言語学」の勉強会でもお話をしたことがあったかと思いますが、現在、ヨーロッパとアメリカとで、音韻論の研究に異なる流れが生じています。アメリカでは、利き手と非利き手の音韻構造をそれぞれ別の音韻構造で説明しています。ヨーロッパには、これを統一的な構造で説明しようという流れがあります。

ヨーロッパでも、オランダとフランスとでは大きな違いがあります。オランダでは、基本的にアメリカと同様の手法をとっています。つまり、音声言語と同じ理論的枠組みで手話の音韻を見ています。しかし、フランスでは、そのような見解には反対の立場をとります。音声言語の枠組みをそのまま手話に適用するのではなく、手話独自の理論もあるはずだという議論をしています。言語を考える上で音声言語の理論を中心に考えるのではなく、手話の理論からスタートするべきだと主張する先生もおられます。

13.手話の形態論と統語論

【小】：ご専門である音韻論についてお話しいただきましたが、その他、形態論や統語論の分野については？

【森】：形態論は、CL や動詞についての研究があるくらいで、先行研究がまだ少ないです。また、形態論や統語論の場合には、手話の特徴に限って言及されることが多いという側面があります。

このあたりについては、今、私も勉強しているところです。統語論には、英語についての研究がたくさんあります。チョムスキーが発表した生成文法の理論も、まず英語を基礎にして組み立てられたかと思います。統語論のほとんどの理論が、生成文法の影響を受けています。英語にとって語順は大切な要素ですが、語順の分析を通して規則が見出され、それら規則を総合的に捉える中で、生成文法の多くの研究が蓄積されてきています。

1980 年ごろ、アメリカで、日本語を生成文法の理論を通して分析する試みが始まりました。日本語の場合は「私は学校に行きました」でも「学校に私は行きました」でも、どちらでも言うことができますよね。助詞が伴うために、それが可能となるのです。語順が入れ替わる言語というのは、アメリカなどの英語を基本に考えてきた研究者にとっては、不思議なものだったと思います。日本語のこの現象を生成文法でどう説明すればよいのか、という研究が始まりました。日本語のような語順の入れ替わりが容易に起こる言語を、生成文法の枠組みでどう捉えていくのかという研究です。これを説明する「かきまぜ規則」が登場して、言語の仕組みの解明がさらに進みました。生成文法の研究は、こうした語順が入れ替わる言語の分析もできるようになってきたのです。

手話も、以前は語順が容易に入れ替わるという見方をされていました。日本語の語順の入れ替わりに一定の規則があるというのであれば、手話でも語順の

入れ替わりに一定の規則があるのではないかと考えられるようになりました。語順の入れ替わりの規則は、とても複雑なものです。日本語の生成文法の知識を身につけた上で、手話と比較していくということが求められます。アメリカでは、語順の入れ替わりの際の NMS も含めて、統語論の中で議論されています。NMS が伴って始めて、語順の入れ替わりが可能になるわけで、手話の統語論では NMS が重要な要素と考えられています。

【小】：統語論の関係で、私が以前話を聞いて覚えているのは、NMS のない場合と NMS が伴っている場合で、例えば「/私//学校//行く/」と「/学校//行く//私/」、この/私/の際に NMS が伴っていなければ意味が理解できない。NMS が伴って初めて、だれが行くのかという意味が分かりますよね。基本は NMS で、それがなければ意味が成立しません。そういうことから、文と統語は重要な関係にあるという話を覚えています。

【森】：NMS が伴っているかどうかに加えて、NMS がいつまで保持されているのかも重要ですね。昔は、何度もビデオを見直して分析していましたが、今は技術が発達し、パソコンでの分析もスムーズにできるようになりましたから幸せですね。それでも、分析は大変です。

【小】：ボタンひとつで簡単に操作できるようになりましたが、それでも大変な作業です。パソコンで、手の動きや頭の動きを時間軸に重ねて表記したりできるようになりましたよね。個人的には、統語論のほうに興味があります。

【森】：どんどん研究してってください。

14.手話の社会言語学

【小】：他にも、社会言語学や語用論などの分野があります。先ほど、社会言語学も興味深いというお話でしたが、一言で社会言語学と言ってもさまざまな分野が含まれていると思いますが、興味深いというのはどのあたりでしょうか。

【森】：先ほどお話ししたアメリカの夏期講座に参加した際に、オックスフォード大学の社会言語学者スザンヌ・ロメインが、インドの諸言語が混じり合う社会における言語接触や、母親と父親で違う言語を話す家庭の子どもの言語について講義をされていました。とても興味深かったです。

手話でも同様のことがありますね。違う地域のろう学校出身のろう者どうしが結婚したり、聴者とろう者が結婚したりする中で、子どもは多様な言語使用をします。どちらかの言語を使用することもあれば、それらを混ぜて使うコード・ミキシングもあり、それらの現象は否定されるべきではないということです。そういう例をいろいろお話いただき、視点の幅が広がりました。授業で課せられたレポート課題も、興味深かったです。私は言語復興（リバイバル）、つまり一度絶滅した言語が復活するというテーマで書きました。

【小】：例えば、使わなくなった手話がまた使われるようになるとかですか。

【森】：はい。また、その際に一緒にいた人の中に、父親がメキシコからの移民でロサンゼルス市警の警官をしているという女性がいて、手話を学習中の方でした。父親はスペイン語を話せるのですが、移住して以降スペイン語を一切話さず、英語だけを使用していたそうです。しかし、その後、実は父親がスペイン語を話せるということを知り、スペイン語の勉強を始めた。その経験をインタビューしてレポートにまとめ、提出しました。例えば、ろう者でも親

が聴者で手話を使わずに育ち、大きくなってから自分がろう者であるというアイデンティティに目覚め、手話を始める人もいますよね。それと似ていますね。

【小】：おもしろいですね。

【森】：関連分野の話ですが、カリフォルニア大学バークレー校というのは、認知言語学の分野で有名な大学です。小藺江さんもご存じのポール・デュディスというろうの手話言語学者も、認知言語学に興味があったため、バークレー校に行きました。また、バークレー校出身の博士号をとった聴者の先生も、ギャローデット大学にいます。

認知言語学というのは、手話との関連が強いですね。目で見たものを脳がどのように処理していくのかという研究です。音声言語の場合は、目で見たものと脳での処理との関係が見えにくいですよね。一方、手話の場合には、手で表現されるものを通して、目で見たものがどのように脳で認知されているのかというプロセスが見えやすいという特徴があります。そのために認知言語学の研究者には、手話と関係している人も多くいます。

15. ろう者の意識変化と勉強の場

【小】：さまざまな所で講演をなさる中で、実際にろう者の意識が変わっていったことはありますか？

【森】：あります。以前、ろう者の運動団体のみなさんの前で日本手話と日本語対应手話についてお話をさせていただいた時、その違いを聞かれたことがあります。はじめはいぶかしげな顔をしていたみなさんが、お話を聞いていくうちに、最後は理解してくださいました。

【小】：前進ですね。

【森】：そう思います。日本語対应手話とはそういう意味だったのかと、それまでは知らなかったわけです。違いを区別する方法が分からなかったのです。きちんと説明さえすれば、理解してもらえます。いつも使っている手話はこちらで、こちらとは違うということを確認したりすればよいのです。

【小】：以前、1980 年にヨーロッパで行われたろう者学 (Deaf studies) のワークショップに参加した時、世界ろう連盟の理事が何人か参加されていて驚きました。自分たちも知識を持つ必要があるということで参加していました。つまり、手話やろう文化について役員が知識を持っていないといけないということで、言語学や社会言語学について学んでいるんです。必要なことですよね。そういうことを続ける中で、進展があると思います。

【森】：ほんとにそうですね。運動をやっていればわかる、大丈夫ということはないわけです。手話言語学の勉強もしないといけません。

【小】：私は今、手話を教えている中で、言語と文化が関連しているなど実感させられることがあります。聴者とろう者が会話している中で、ずれが生じます。例えば、話し始める際に、ろう者は NMS で相手に会図を送ってから話し始めるのですが、聴者は突然話し始めます。それで驚かされることがあります。一般のろう者はそうすることにあまりに慣れ過ぎてしまっていて、それを聴者に教えなければならぬということに気づかないんですね。

このように、言語と文化というものは切っても切れないものなんですね。でするので、そういった知識も必要であるとうるさく言っています。

【森】：もっといろいろなワークショップが増えてほしいですね。

【小】：本当にそう思いますね。勉強できる場所や環境というものも、考えていかなければなりませんね。

16. ろう者と聴者が一緒に研究を進めること

【小】：日本の大学では、かつてストーリーが若い研究者たちを育てたのと同様のことができる人が多いと思います。それは難しいことなのでしょうか。

【森】：それが、日本の抱えている問題のひとつです。手話の研究をされている方はそれが専門というわけではなく、ほとんどが英語の専門で、それと並行して手話を研究されています。語学の先生方は、研究室として学生を集めて指導し、論文を書かせるということがほとんどありません。英語を教えることに専念しています。小藺江さんも大学に通われていたので、ご存知だと思います。英語の授業を取っていましたか？

【小】：私の場合は中国語でした。

【森】：中国語の場合でも、1年、2年と中国語を教えて、そこまでですね。その後会うことはありませんよね。

【小】：そうでした。

【森】：一般教養ではなくて、専門という立場で指導される先生が必要です。つまり、聴者も努力をしないとダメですね。言語学は難しいからと言っては、がちが明きません。

もうひとつの問題点は、研究をする際に、ろう者とともに研究ができるような力を持った人が少ないということです。手話に自信がなくて、ろう者とコミュニケーションするのが苦手で、聴者どうしのほうがやりやすいということで、聴者で集まって研究を進めていってしまいます。ろう者と聴者が一緒に研究を進めて、共同研究として論文に名前を残していく。大学の卒業論文の場合には、それで単位を出すこともできると思います。しかし現状は、ろう者からデータを収集するだけというケースが多いですね。そのあたりを変えていかなければなりません。

本来は、ろう者と聴者がともに考えていく中で、両者が納得した形で研究が進められるべきです。ろう者を利用して手話のデータだけを収奪していくようなやり方ではダメですね。両者が対等な関係で進められるようにならないといけません。ろう者の方も、聴者に対してきちんと対等に渡り合える力が必要です。

17. 手話は福祉か？言語学か？

【小】：以前、フィンランドのろう者が来日した時、手話の本が書店の福祉のコーナーに置いてあるのを見て、これはおかしいと言っていました。

【森】：福祉で済ませる時代には、もう終止符を打たなければなりません。そのための活動をしていかなければならないですね。欧米が特別で、日本では手話は福祉の範疇のままでかまわないと思っている人がよくいます。はたしてそれでよいのでしょうか？

【小】：アメリカでは、そういった変化はありましたか？

【森】：アメリカでも、かつては手話は福祉の領域で扱われていましたし、今

でも依然としてそういう見方も残ってはいますが、徐々に変わってきました。解決したというのではなく、今なおそれに向けて取り組んでいるところですね。欧米のろう者は、妥協することなく活動を続けています。それでもなお、すべてが変わったわけではないのです。

話は少しそれますが、国連の障害者についての議論の中で、福祉という考えが今もまだ根強く残っています。その中で、あるアメリカの車いすの活動家がこう発言しました。「私たちが活動をしているのは、非障害者のみなさんのためです」と。

一体そのことばが何を意味するのか初めは分からなかったのですが、つまりこういうことでした。みなさんは自分が障害者になるという経験を今までしてこなかったのも、もしいざ障害を受けた場合にどうしたらいいのか分からない。しかし、私の場合は小さい時からずっと車いすですから、どうやっていけばいいのかを熟知している。なので、みなさんがそうなった場合には私がサポートできます。すべての人のために彼は活動をしているというんですね。それだけ自信をもっています。

下肢障害とろう者との違いはあるにせよ、相通じるところはあります。ろう者もいつまでも、ただサポートを受けているというだけではだめなんです。脳の研究にしても、手話の研究から得られたものにより解明が進んだということもあります。音声言語に固執するのではなく、手話の研究も含めることで、言語について見えてくるものがあります。手話の研究は言語全体の理解に貢献し、人類のためになっているんです。

18.手話学会は要らない？

【小】：これから手話言語学を発展させていくことについて、現在、さまざまな大学で手話についての取り組みがなされていますが、そこで森さんのような方が活躍することが期待されていると思います。

【森】：私も、そうできるように努力します。

【小】：その時には、私もメンバーとしてお手伝いさせていただきます。

【森】：ありがとうございます。よろしくお願いします。一筋縄にはいきませんが、がんばってそうなるように努力します。

【小】：例えば、現在の手話の研究をなさっている先生方は、もともと英語を専門とする教員が多いようです。はじめから手話を専門とする方が担当するのがよいと思いますが、いかがでしょうか。

【森】：変革には時間を要しますね。大学に手話研究の学科を立ち上げるためには、まず毎年学会で手話に関する研究を発表することが必要です。日本言語学会の中でも、手話の発表はたまにあるくらいです。言語の学会の中で、毎年手話の研究発表がなされ、研究者たちに名前を覚えてもらわないといけません。

そして、手話の分科会が立ち上がれば、手話が言語であるという認識が広がっていきます。そして、「手話は言語なのに、手話学科というものがないのはおかしい」というふうに、徐々に社会が変わっていきます。

今回の対談は手話学会の企画で実現しましたが、語弊があるかもしれませんが、私は、ある意味で手話学会自体は不要だと思っています。ろう者だけが集まっているのと同じことです。手話学会の中だけで通じるものをもっている、

意味がありません。広く認められなければいけません。言語学会の下部組織として手話の研究グループのようなものがあれば、なおよいと思います。そのほうが、幅広く活動できます。

また話はそれますが、私は今「障害と開発」という研究に携わっています。そのような研究はまだ少ないのですが、毎年学会発表をすることによって、認められるようになってきました。国際開発学会の中に「障害と開発」部会が立ち上がり、私はその部会長も務めています。毎年発表をすることで、重要なテーマだということを認知してもらいます。そうすることで、学会から予算の配分を受けることもできるのです。

【小】：そういう積み重ねが大事なんですね。手話についても、言語学や文化人類学など、いろいろな分野の学会で発表をしていくのが大事なんですね。

【森】：そうだと思います。

19. これからの手話学会と手話通訳

【森】：それから、論文を書いていくことも重要です。論文を雑誌に載せ、発表する。このことが重要です。

【小】：私の場合、論文を書くというのは、最も苦手な分野です。

【森】：手話で語り、それを翻訳してもらって確認するという方法もあります。

【小】：そうですね。先ほどおっしゃったように、今後、聴者がろう者と共に研究していくという方法を模索しないといけません。また、逆に、私たちろう者も、聴者と共に研究ができるようにしていかなければなりません。聴者が研究でいきづまった時は、ろう者がサポートするなどして、お互いに協力し合いながら進めていけばいいですね。

【森】：ネットワークが大切です。特に社会や文化についての専門家にも、もっと関わっていただきたいと思っています。

【小】：そうですね。そういう学会でありたいですね。ただ、そうした場合は、手話通訳も大変ですね。

【森】：手話通訳者も育てなければいけません。手話通訳者から、「知識がないので手話通訳するのが大変だ」とよく言われます。知識を身につけるために、ろう者とともに言語について語り合える場がほしいという声も、手話通訳者からよく聞かれます。

【小】：手話の分からない聴者もいるということを、頭に入れておかなければいけません。手話の分からない聴者がいる場合には、手話通訳を用意しておかなければいけませんし、逆に、聴者たちの中にろう者が入る時も手話通訳は必要です。手話があるところには必ず手話通訳をつけるのが常識というか、本当は手話だけで進められればそれでよいのですが、それで難しい場合には手話通訳を付けることがマナーですね。

以前、ある場所で手話通訳が用意されていなくて、いったいどういうことだ！と

思ったことがありました。手話通訳の認知も広げていかなければなりません。そのようなことも、手話学会が率先して、他の学会に対して啓発していったらえればと思います。

【森】：ろう者が聴者の存在を意識しているのと同様に、聴者もろう者のことを意識してもらえればと思いますね。聴者が、ろう者はろう者だけでどうぞとって、自分たちだけで音声言語で話をして手話研究を進めていくということがないようにしてもらいたいですね。それは失礼にあたりますね。

【小】：今後、そのようなことも啓発していかないとはいけませんね。そういうことがきちんとできてくれば、手話の研究者も増えてくると思います。

20.おわりに：ろう者としての使命

【小】：対談の中で、森さんの研究活動の経緯をお聞きして、私には真似できないと思うことが多くありました。

私は元来、研究とは無縁の人間でした。周囲の人たちから、一体どういう風の吹きまわしで研究をしているのだと言われます。しかし、私の中では、それは使命だと思うんですね。

ろう者がもっと団結していかなければ。先ほどの「言語復興」の話じゃないですが、今は、みんな遊ぶことが楽しくて、ろう者コミュニティが脆弱になってきています。

手話の研究だって興味深いことがいっぱいあるということをアピールし、手話を広げていくための発信源として自分が役に立てばと思っています。そして、ろう者だけでなく、他のいろいろな人に協力してもらえるような環境づくりも必要ですね。森さんが、以前、いろいろな情報を収集したように、今度は逆に自分たちがどんどんいろいろな所に行って学んでいかなければなりません。

【森】：ストーキーが、当初は「でたらめ」と聞かされていた手話を自分の目で観察して、そこから研究が始まりましたよね。そのように、聴者はまずろう者と向き合って研究をしていくことが重要です。そのためには手話を身に付けなければいけませんし、手話でろう者と意見交換をしていかなければなりません。ろう文化も知り、お互いやりとりをしていくことが大切です。

そういうことをせずに、ただろう者の手話だけビデオで撮って、自分だけで分析を進め、発表をするというのではいけません。ろう者もビデオに撮られて、それでおしまいではいけません。互いが対等にやりあえる自信や力を持たなければいけないと思います。

【小】：森さんのお話をお聞きして、私も思ったのですが、同じ日本にしながら目を向けられることの少なかったろう者の存在が浮かび上がってきた時、はたして聴者たちは放置できるのかどうかです。以前、アイヌ民族の文化が失われていくという状況を受けて、何かの条約が採択されましたね。

【森】：国連の「先住民族の権利宣言」ですね。

【小】：それが採択されて、さまざまな行動が起りましたが、ろう者もコミュニティの人数が減少してきているということに危機感を持たなければいけません。そのための啓発活動をし、問題提起を行っていければと思います。

【森】：本当にそうですね。

【小】：ありがとうございました。

付記

本対談は、JST さきがけ「情報環境と人」（総括：石田亨）、課題名「インタラクション理解に基づく調和的情報保障環境の構築」（代表：坊農真弓）の事業の一環として行われました。

対談は日本手話によって行われ、以下の方がたのご協力により日本語への翻訳作業が行われました。

収録スタッフ：菊地浩平（国立情報学研究所）、森内康博（株式会社らくだスタジオ）

日本語翻訳：平英司（関西学院大学）

日本語翻訳協力：前川和美（関西学院大学）

-2010年7月12日対談実施、2010年10月14日受理-